

# 六朝の文学用語に関する一考察

## ―「縁情」を中心に―

福井佳夫

### 一 李善の「縁情」解釈

「詩縁情而綺靡、  
賦体物而瀏亮。」

詩は感情によりそつて華麗であり、賦は事物を模  
写して明瞭でなければならぬ。

これは文学批評の名篇、西晋の陸機「文賦」中の一節である。この一節、著名な「文賦」のなかでもとくに著名なものとなっている。本稿では、このうちの前句「詩縁情而綺靡」、なかでも「縁情」の語に着目して、六朝文学用語の意味の不安定さについてのべてみたいとおもう。

この「詩縁情而綺靡」句はふつう、右のように「詩は感情によりそつて華麗」であると解される。ところが、『文選』「中の「文賦」」に注釈をほどこした初唐の李善（六二〇？～六九〇）は、この句に対し、

詩以言志、故曰縁情。……綺靡、精妙之言。

詩は志をかたるものだ。だから陸機は本文で「縁情」と表現したのである。……「綺靡」は精妙ということだ。

と注する。つまり本文の「縁情」は「志をかたる」、「綺靡」は「精妙」の意だと解しているのである。この李善の注にしたがうと、「詩縁情而綺靡」句は「詩は志をかたつて精妙でなければならぬ」と解すべきことになるう。

この李善の注釈、およびそれによる解釈は、現代の我われには異様なものにうつる。なにがどう異様なのかといえ、第一に注釈のしかたが異様である。周知のように李善は、引証（典拠を引用する）による注をモットーとしていた。それなのに、ここではなぜか引証によらず、

釈義（自分で意義を解釈する）によって注しているのである。

というのも、李善注中の釈義のことば「詩以言志」（詩は「政治や道徳への」志をかたるものだ、の意）は、儒家詩学のうえで著名なテーゼだった。たとえば先秦や両漢ごろから、すでに

○「尚書舜典」詩言志、歌永言。

詩は志をかたり、歌はことばを詠じるものだ。

○「左伝襄公二十七年」詩以言志。

詩はその志をかたるものだ。

○「荀子儒効」詩言是其志。

詩は聖人の志をかたるものだ。

などの用例が存在していた。なかでも文学史上でとくに重視されてきたのが、『詩経』の「詩大序」の

風、風也。教也。風以動之、教以化之。詩者、志之所之也。

風とは、風刺することである。また教化することである。ひとを風刺してうごかし、教化してよくするのだ。詩は、志がうごいたものである。

という一節だった。これによって、詩は政治や道徳に関係づけられるようになった。それゆえ李善は、「文賦」

の「詩縁情」に對し「詩以言志」という注をほどこしたければ、これらの用例のいずれかを引証すればよかったろう。それが李善の注釈方針になつたはずだ。ところが李善は引証でなく、釈義によって「詩は以て志を言う。故に縁情と曰う」と注したのである。

異様さの第二は、注釈の内容である。周知のように陸機以前は、儒家詩学の影響をうけて、詩は「言志」つまり政治や道徳への志をかたるものとされてきた。そうしたなか陸機は、伝統的な「言志」をしりぞけて「縁情」を前面にうちだし、ひとの感情によりそつて自然な思いをのべるものと規定した。そして「綺靡」（華麗な、の意）の語も布置して、「詩は感情によりそつて華麗」であるべしと主張し、詩を政治的なものから唯美的なものへと変容させたのである。

ところが李善はこの「詩縁情而綺靡」句に、右の通説とはちがった注釈をほどこしている。「縁情」を「志をかたる」と解し、「綺靡」を「精妙」と釈するのだ。前者の解は、画期的な「詩縁情」説を否定し、ふるい言志説を主張するかのように見える。これは、伝統的な儒家詩学にかえるもので、いわば時計の針をもとにもどそうとするものといえよう。また後者への注「綺靡、精妙之言」も、「精妙」の語の解釈いかによるが、すくなくとも「我われがふつうに理解している」華麗や浮艶のニュアンスとはことなつたものである。

そうした奇妙な解釈をしたせいにか、注釈の文もわかり

にくいものになった。右にみたごとく、「言志」と「縁情」とは、いわば対極的な詩観だといつてよい。すると、李善注の「詩は志をかたるものだ。だから陸機は本文で（縁情）と表現した」（詩以言志、故曰縁情）という文章は、「故」（だから）による順接ふう接続が不適に感じられ、文意がスムーズにとりにくい。たとえてみれば、李善注の注文は「人間は神がつくった。だから本文で（人間は猿から進化した）と表現した」のとき論理であり、矛盾した印象をもたざるをえないのだ。

以上、李善注の異様さを二点あげてみた。もつともこうした異様さはだれもが感じることであったので、そのぶん注目され、現在ではきちんと説明がされている。前者（注釈のしかた）については後述する（注（6）参照）として、ここでは後者（注釈の内容）のほうを説明しておく。

後者の異様さというのは、我われに「言志と縁情は対極的な詩観だ」という先入観があるから発生するのであり、もしそれがなかったら、李善の注も異様には感じられなかったらう。だがどうやらその先入観は、修正される必要があるようだ。というのは近時、何人かの研究者によって、陸機当時、「情」と「志」とは対立概念ではなく、ともにひとの内心の思想感情をさしていたことが指摘されているからである。つまり「情」「志」は相互に置きかえ可能な字であり、「縁情」と「言志」の二語も対極的な関係でなく、たがいに通用しあっていたよう

だ（両語に通用する日本語訳をかんがえれば、ややあいまいな「思いを叙する」あたりがふさわしいだろう）。

これを要するに六朝のころ、「縁情」と「言志」はともに両様の意味を有していて、

縁情Ⅱ①感情によりそう（言志①と対極）。②思いを叙する（言志②と同意）。

言志Ⅱ①政治の志をかたる（縁情①と対極）。②思いを叙する（縁情②と同意）。

ということだったようだ。我われは両語を①で解するので、李善注を異様だと感じるが、李善は②で解したのでらう。②と解すれば、「縁情」と「言志」を「故」字でむすび、「詩は以て（志を言う）、故に（縁情）と曰う」と釈しても、べつにかまわないことになる。その意味でこの李善注は、その解釈が正鵠を射ているかどうかはべつとして（後述）、けつして根拠のない注釈だったわけではないのである。

## 二 「雕虫篆刻」の語義変化

右の李善注の吟味によって推察できることは、六朝の文学用語は当時、我われがかんがえる以上に、意味内容がゆれていたのではないか、ということである。現代の我われからすると、「縁情」の語は安定的で固定した意味、つまり「感情によりそう」の意を有し「そして、詩を政治的なものから解放する画期的な意義を有し」ていたろうとおもわれる。だがそれは現在の見かたであって、

陸機や李善のころは、そうした「感情によりそう」だけでなく、「右でみたように」あいまいな「思いを叙する」の意も有していたようだ。すくなくとも、そうした解釈をする「李善や李周翰のごとき」ひとも存在していたのである。すると「縁情」のごとき六朝の文学用語は、どうやら単一の意味とはかぎらず、ときに複層的（あるいは多層的）なニュアンスを包含していたと解したほうがよさそうだ。

ここでいったん「縁情」の語からはなれ、他の例もみてみよう。たとえば揚雄の『法言』吾子に由来する、「雕虫篆刻」という語の意味をかんがえてみたい。まずこの語の典拠をしめしておく、

或問吾子少而好賦。曰、然。童子雕虫篆刻。……壯夫不為也。

あるひとが「貴殿はわかいころ、よく賦をつくられましたね」とたずねた。私はこたえた。「そうだ。でも賦作は子どもが虫書や刻符（難解な書体）をまなぶようなもの。……まともな大人だったら、賦などはつくらないだろう」と。

というものである。わかいころ「儒家ふうの」諷諫の理想を信じていた揚雄が、やがて諷諫の無力さを痛感して、賦の創作をやめてしまったという話である。こここの「雕虫」「篆刻」はともに難解な字体をいうが、この話柄が

ら転じて、詩文に瑣細な技巧をこらすこと、またそうした技巧的文学をさすようになった。それゆえ文学用語としては、「技巧倒れの詩文」という意味で、貶価的ニュアンスをふくんだことばだった。

ところが六朝「とくに後期」の文学批評になると、その「雕虫篆刻」「や略した「雕虫」「雕篆」の語が褒辞として使用されるようになる。たとえば、

○「文心雕龍時序」越昭及宣、実継武績、馳騁石渠、暇豫文会、集雕篆之軼材、發綺縠之高喻。

昭帝をすぎて宣帝が即位するや、武帝の功績をお継ぎになった。石渠閣で講論し、余暇に文会をたのしみ、雕篆の逸材をあつめ、辞賦をあや絹にたとえられたのだ。

○「梁元帝内典碑銘集林序」予幼好雕虫、長而弥篤。遊心釈典、寓目詞林。頃常搜聚、有懷著述。

私は幼時から雕虫がすきで、長じてからますます嵩じてきた。經典のなかに精神をたゆたわせ、文学のなかに沈潜してきた。最近では書物をあつめていて、なにか著述しようとかんがえている。

○「沈約武帝集序」及登庸歷試、辞翰繁蔚。牋記風動、表議雲飛、雕虫小芸、無累大道。

「わかいころ、まだ登極せぬまえの天子さまが」登用の試験をうけられたさい、その答案の文章はすばらしいものでした。また牋記の文は躍動し、

表議の文は飛翔するかのようで、その雕虫小芸ぶり、聖道をみだしませんでした。

○「劉孝綽昭明太子集序」是以隆儒雅之大成、遊雕虫之小道。握牘持筆、思若有神、曾不斯須、風飛雷起。

そういうわけで皇太子さまは儒雅の隆盛をはかり、雕虫の小道にあそばれました。牘をとり筆をもてば、文思は神のごとく、ちよつともたたぬうちに、風や雷のごとく発想がわきでてこられました。

などである。ここでの用例は、いずれも詩文の語におきかえてよかるう。ただ、そのニュアンスは「技巧倒れの詩文」ではなく、むしろ肯定的な「技巧すぐれし詩文」であることに注意せねばならない。

すこし解説しておこう。第一例は宣帝が「雕篆の軼材をあつめ」たというからには、「雕篆」の語は肯定的な意味だとせねばならない。第二例の「私は幼時から雕虫がすきで」はすこし微妙で、自負の発言ともとれるが、卑下ないしは謙遜（雕虫ごときをこのむダメな自分）の意ととれなくもない。ただ、かりに卑下の意があつたにせよ、堂々と「雕虫がすき」と表白しているからには、内心では恥だとおもっていないのだろう。第三・四例は、臣下がときの天子と皇太子の文集のため、つづった序文である。そうした集序のなかで「天子さまの」雕虫小芸ぶりは、聖道をみだしませんでした」「皇太子さま

は」雕虫の小道にあそばれ」というからには、貶価的ニュアンスなどあるはずがない。

ただややこしいのは、右のごとき文学批評の場合以外のときは、褒辞ではないということだ。たとえば、政治論の場で「雕虫篆刻」の語が使用された場合は、依然として貶価的ニュアンスで使用されている。

○「沈約上疏論選舉」假使秀才對五問可稱、孝廉答一策能過、此乃雕虫小道、非閑理功得失。以此求才、徒虛語耳。

たとえ秀才が五問に解答して称賛され、孝廉が一策の試験を通過したとしても、それは雕虫小道にすぎず、政務の功績や得失とは関わりはありません。こんなもので人材をもとめるのは、むなしなことなのです。

○「何之元梁典総論」然雕虫之技、非閑治忽。壯士不為、人君焉用。

だが雕虫の技巧などは、政治のよしあしと関係ないものだ。大丈夫はそんなことをしないのだから、君主たるものが、どうして従事してよかるうか。

右の第一例は、人材登用を論じた文章だが、ここでの「雕虫」は「技巧倒れの詩文」の意でつかわれている。おなじ沈約の作でありながら、「武帝集序」の文学論では褒辞だったのに、上疏中の政治論では貶価的ニュアン

スをおびているのだ。こうした用途による意味の使いわけは、なかなか興味ぶかい。第二例は、「壮士不為」句に揚雄の典拠が意識されており、あきらかに貶辞としてもちいられている。

このように揚雄に由来する「雕虫篆刻」の語は、ほんらい貶辞のみだったのだが、六朝になると褒辞（おもに文学論）と貶辞（おもに政治論）の両様の意味を有しているのだ。この種の「Aの語は、漢代ではaの意のみだったが、六朝になると、aにくわえbの意も有するようになった」のごとき状況は、文学用語だけに発生しているのではない。よりひろく、通常の語においても同種の事態が発生しており、漢語史（なかでも語彙史）のうえでひとつの画期をなすものといつてよからう。

吉川幸次郎氏はかつて、そうした六朝語彙の意味変化を「新意」の「充入」と称し、我われに注意を喚起された（『六朝文学史研究への提議一則』全集第二七巻）。吉川氏が提示された例を紹介すると、たとえば「斯文」の語は、『論語』子罕の「天ノ未マダ斯文を喪サザルヤ」云々に由来し、もとはひろく「文明一般」を意味していた。ところが六朝ではその語に「斯文未マダ作ラズ」（文選序）のごとく、「文学」という新意を充入して使用している。あるいは「開悟」の語は、『史記』商君列伝の「吾レ公ニ説クニ帝道ヲ以ツテスルモ、其ノ志ハ開悟セズ矣」などに由来し、ひろく「政治家や社会人としての覚醒」の意味だった。ところが六朝になると、『南

史』劉峻伝に「少時ニハ未マダ開悟セズ」とあるように、「個人の知性の覚醒」という新意でも使用している——などである。これらの新意充入は微細な意味変化なので、おおざっぱな読書では気づかないかもしれない。だが、精細な読書をころざす者には、なるほどと了解されてくるに相違ない。

### 三 「吟詠情性」の語義変化

もうひとつ、複層的な意味を有した語の例として、「吟詠情性」をみてみよう。この語は「詩大序」に由来することばで、本稿が問題にしている「縁情」の語とも関わりを有するので、ここで例にあげるのにふさわしい。まず典拠をみておくと、つぎのようなものである。

傷人倫之廢、哀刑政之苛、吟詠情性、以風其上。達於事變、而懷其旧俗者也。故變風發乎情、止乎礼義。發乎情、民之性也。止乎礼義、先王之沢也。

「乱世となるや、『詩経』の」詩人は人倫の衰微をかなしみ、刑罰の苛酷さをいたみ、その思いを「詩に」詠じて為政者を風刺した。かく詩人は世の中の移り変わりをみきわめ、旧俗をなつかしんだのである。こういうわけで変風の詩は人びとの心情に生じるが、「儒家の」礼のなかにおさまるものだ。心情に生じるのは、人の性がそうだからであり、礼のなかにおさまるのは、先王の恩沢に

よるからである。

この文は、乱世となつて国が衰亡したとき、変風の詩が発生すると説明した部分である。乱世となるや詩人は、かなしき思いを詩に詠じて為政者を諷する——これが「吟詠情性」のもとの意味である。この典拠によれば、「吟詠情性」の語は直截には「かなしき」思いを「詩に」詠じる」の意、敷衍して「詩をつくる」の意で用ゐられることになる。ところが、旧時のじつさいの用例をみてみると、かならずしもそのとおりではなさそうである。ここでは、帰青氏の「論南朝詩学対（吟詠情性）説的改造」（『齐鲁学刊』二〇〇〇—三）という論考に依拠しながら、「吟詠情性」の意味を吟味してゆこう。

帰青論文はそのタイトルどおり、「吟詠情性」の語義が六朝（南朝）でいかに改変されたかを論じた論考である。そのためまず、漢代詩学（帰氏は「詩大序」をその代表とされる）での意味が考察されている。帰青氏によれば漢代の詩学では、この語は「詩歌は思いを詠じるものである。だがその思いは、儒家の礼になつたものでなければならず、またその礼で規制されていなければならぬ」という含意があつたという。つまり漢代のころは、右の典拠の後半部分（「故変風発乎情」以後）もふくんでいて、ただ「思いを詠じる」でなく、「儒家の礼になつた」思いを「その礼で規制された形で」詠じる」意味だったのである。

ところが六朝、とくに南朝の詩学になるや、「吟詠情性」解釈はおおきな改変をこうむつた。その改変は二方面にわたる。第一は、「情性」の「情」意の改変である。基本的な「思い」の意味あいはいかかわらないものの、「儒家の礼になつた」のニュアンスがうしなわれ、多様な「思い」——いっさいがふくまれるようになった。つまり「情」の範囲が拡大してきたのである。第二は、「情性」の「性」意の改変である。漢代に有していた倫理性がわすれられ、あらたに「才氣」の要素が注入されてきたのだ。こうした改変の結果、南朝詩学における「吟詠情性」の含意は、「詩歌は、日々の生活のなかでの多様な思いや感情を詠じるものであり、またそのひと独自の才氣も表現すべきだ」ということになつてしまつた。

以上が、帰青論文の要旨である。これをまとめると、「吟詠情性」の語は漢代では儒家の教えに忠実で、

A II 「儒家の礼になつた」思いを「その礼で規制された形で」詠じる。

の意だつた。しかし六朝になると、儒家の規制からはなれ、

B II 日々の思いを「儒家の礼からはなれて自由に、そして才氣も表現しつつ」詠じる。

の意も有するようになった——ということだろう。この議論、重点が「情性」のほうに、かたむきすぎているきらいがないではない。それでも六朝における「吟詠情性」の含意が、漢代の伝統的解釈とどのようにちがつてきた

かについて、わかりやすく説明してくれたものだといつてよい。

こうしたご指摘をふまえて、六朝におけるつぎのような「吟詠情性」の用例をみてみよう。

○「袁宏三国名臣序贊」夫詩頌之作、有自来矣。或以吟詠情性、或以紀德頌功。雖大指同歸、所託或乖。

『詩經』の詩は、それぞれ來歴を有している。ある篇は思いを詠じ、ある篇は徳や功を顕彰している。その大要はおなじなのだが、その趣旨は各篇ごとにちがっている。

○「裴子野雕虫論」自是閭閻少年、貴游總角、罔不擯落六芸、吟詠情性。

それから以後、巷間の若者や貴族の子弟たちは、こぞつて經書を放擲して、思いを詠じた詩をつくるようになった。

○「詩品中序」若乃經国文符、応資博古、撰徳駁奏、宜窮往烈。至乎吟詠情性、亦何貴於用事。

經国にかかわる文章をかくには、ひろく古代までの事例をしっておくべきだし、徳望をたたえ駁論をする文章では、過去の功業を知悉しておかねばならぬ。だが自己の思いを詠じるときには、どうして典故をつかう必要があるだろうか。

○「蕭綱与湘東王書」若夫六典三礼、所施則有地、吉凶嘉賓、用之則有所。未聞吟詠情性、反擬内則之篇、

操筆写志、更模酒誥之作。

六典とか三礼の文は、詩文につかうときには、それにふさわしい場所があり、吉凶とか嘉賓の文も、詩文に利用する場合には、それに適した場面があるはずです。自分の思いを詠じるのに、『礼記』内則（家庭内の礼儀を論じた文）の文章を真似たり、筆をとつて志を叙するのに、『尚書』酒誥（飲酒への戒めをつづった文）を模したりするなど、私はこれまで耳にしたこともありません。

第一例は、『詩經』を解説した文脈での使用である。

そのためか、「吟詠情性」は「紀徳頌功」（徳や功を顕彰している、の意）と対応しており、あきらかな儒家ふう発言となっている。したがって、この東晋の袁宏の文章では、まだAの意味だといってよからう。

第二例は、齊末にかかれた「雕虫論」の一節である。

ここでは裴子野は、經書を放擲して浮華な五言詩をまなぶ風潮を批判している。そうしたなか「吟詠情性」（思いを詠じた詩をつくる、の意）の語は、「擯落六芸」（經書を放擲して、の意）と正対を構成しており、あきらかにBの意で使用されている。ここの「吟詠情性」は「詩大序」に由来するにもかかわらず、儒家の規制からはずれた行為とされているのだ。典拠本来の意義からみると、ずいぶん乖離した用法だといわねばならない。

第三例は、梁代の「詩品序」の一節。典故使用の是非



を論じた部分である。ここでの「吟詠情性」の語は、「經国文符」（經国にかかわる文章、の意）や「撰徳駁奏」（徳望をたたえ駁論をする文章、の意）とはちがつて、という文脈でつかわれている。つまり、そうした「儒家ふう」經世の行為とはちがつて、自己の思いを詠じるところというわけだから、やはりBの意味だとすべきだろう。

第四例は、宮体詩をこのんだ蕭綱の書簡文である。ここで蕭綱は、作詩では適切な模範をえらべと主張している。そうしたなか、情性を吟詠するのに、『礼記』内則の文章を真似たりするのは、とんでもないお門ちがいだと主張しているわけだ。『礼記』は儒家の經典である。「吟詠情性」に『礼記』がふさわしくないということは、つまりこの「吟詠情性」は、反儒家的な行為をさすことになる。するとこの用例も、Bの意味で使用されているとかんがえてよからう。

以上、意味が単一でなく複層的である文学用語の例として、「雕虫篆刻」と「吟詠情性」の二つをあげてみた。これによって、六朝文学批評の用語には、「漢代と」おなじ語であっても、包含する意味や陰翳がことなっていて、複層的なニュアンスを包含したものが存することがわかった。もとより、すべてがそうした複層的ニュアンスを有するわけではないが、一部といえどもこうした例があることは、よく了解しておく必要があるだろう。

#### 四 唯美と儒学

では、なぜ六朝では複層的な文学用語がおおいのか。この疑問に対し、梶青氏は同論のなかで、六朝の詩学が二つの志向のはざまに位置していたからだ、と回答されている。ひとつは唯美主義へむかう志向、もうひとつは伝統的な儒家詩学への志向である。

まず前者は、わかりやすい。私なりに「雕虫篆刻」を例にとつて説明しよう。この「雕虫篆刻」の語、先述したように、「儒家ふうの」諷諫に役だたぬ瑣細な技巧や、そうした技巧をこらした詩文をさす貶辞だった。ところが、六朝とくに斉梁のころの唯美主義全盛の時期は、その瑣細な技巧こそが重宝されたのである。されば、漢代に貶辞だった「雕虫篆刻」も、瑣細な技巧をおもんじる六朝では、「技巧すぐれし詩文」の意もおびてきたのだろう。かくして六朝の「雕虫篆刻」の語には、貶辞と褒辞の対極の意味あいと併存することになったのだ。おなじことが「吟詠情性」の語にもいえよう。儒家ふう規制がつよかった漢代では、Aの意味がはるかに優勢だったが、六朝になると、唯美主義の影響によって儒家の規制をはなれ、Bの意味のほうへ軸足をうつしていったのだろう。これを要するに、六朝文人たちはふるい革袋（儒家ふう文学用語）のなかに、あたらしい酒（唯美的意味）をそそぎこんだのだ。それによって「雕虫篆刻」「吟詠情性」とも、含意が変化し複層的なニュアンスを併存するようになっていったのである。

つぎは後者の伝統的な儒家詩学への志向。これについて

ては帰青論文の説明をかりよう。すなわち古典文学の世界では、儒家詩学が極端なまでに発展していた。そのため六朝の新奇な文学的主張といえども、儒家詩学を正面から否定せず、その外殻をかりつつ、そのなかで展開させていった。たとえば六朝文学では、修辭を重視し形式美を追求しているが、じつは孔子の「言之無文、行而不遠」（ことばに文飾がなければ、とおくまで影響をあたえることができない、の意。『左伝』襄公二十五年）の発言に、そうした叙法の淵源があったのである。また梁の簡文帝「誠當陽公大心書」に、「立身先須謹重、文章且須放蕩」（立身の道では慎重さが必要だが、文学創作では自由さがだいじだなあ、の意）といういかにも新奇な主張がある。だがこれも、「詩大序」の「発乎情、止乎礼義」（変風の詩は人びとの心情に生じるが、「儒家の」礼のなかにおさまるものだ、の意）という議論を、偏頗なかたちで発展させたものとみなしえる。かくみると六朝の新奇な文学的主張は、伝統的な儒家詩学のなかに、おのが主張を合理化するための論拠をさがしだし、それを一方的に発展させ拡張させていったものにすぎない、といつてよい。このように六朝の文人たちは、いっぽうで唯美主義を志向しながらも、またいっぽうで旧来の儒家詩学とも関係をもちつづけていたのだった――。

以上が、帰青氏の論考の概要である。

このご指摘は、なかなかおもしろい。帰氏の議論は要するに、「六朝の詩学は、唯美主義と儒家詩学のあいま

に位置し、双方とともに志向するという二重性を有していた」ということだろう。具体的にいえば、儒家ふうの「吟詠情性」の語を、語形はそのままながら、意味を「儒家ふう思いを礼にそつて詠じる ↓ 日々の思いを自由に詠じる」とかえ、唯美ふう文学を主張したのが、それだ。六朝の新奇な文学的主張といえども、じつは、伝統的な儒家詩学の用語を借用し、その解釈を変容させることによって、進展させていったものにすぎなかったのである。ふるい中国では、伝統的な儒家詩学はそれぐらい力がつよかったのだ。

こうした六朝詩学のありかたは、消極的な言いかたをすれば、六朝の文人たちはいくら新奇な文学的主張をしたとしても、けつきよくそれは悟空がお釈迦さまの掌上（儒家詩学）でおどつていたにすぎなかった、といつてよいかもしれない。しかし私は、これをもつと積極的に評価したいとおもう。六朝文人たちは表と裏の顔をつかいわけながら、うまいこと面従腹背をよそおうことに成功したのだと。つまり彼らは表面上、儒家詩学の用語をつかつてはいるが（面従）、しかし裏面ではその語のなかにそつと唯美主義をしのばせ、すきかつてな文学活動をくりひろげていった（腹背）のである。

もっとも、そうした見かたをしたならば、「詩大序」の文から「言志」の主張をひきだした漢代の儒者たちだって、じつは同種の操作をしていたのではあるまいか。客観的にみれば、『詩経』（とくに国風）の詩は、古代

の人びとの喜怒哀樂を率直にのべた民謡にすぎない。しかし「詩大序」の作者（先秦の子夏とされるが、じつさいは後漢の儒者たちだろう）は、その古謡を解説し注解をほどこすという形で（面従）、儒家的な美刺や諷諫の主張をこじつけた（腹背）。さらには孔子刪詩説や采詩の官などの話柄も捏造して、たんなる古謡集を偉大な經典にまでたかめたのだった。六朝文人たちは、そうした漢代儒家たちの手法をみならったというべきだろう。

いずれにせよ六朝文人たちは、伝統的な儒家詩学に服従したふりをしながら、ひそかに新奇な唯美文学を創作していったのである。二律背反的な状況にありながらも、用語の解釈を適宜かえることで、矛盾を表面化させず、うまく弥縫したといつてよからうか。私見によれば、こうした巧緻なやりかたは六朝だけでなく、どの時代でもおこなわれていたのではないかと推測するが、こうしたおokiな問題は、べつの機会にゆづらねばならない。

## 五 「縁情」の複層的意味

では話題をもどし、「文賦」の「詩縁情而綺靡」の場合をかんがえてみよう。第一章でもみたが、ここの「縁情」の語は、「①感情によりそう」とあいまいな「②思いを叙する」の二つの意味を有していた。これは、「雕虫篆刻」や「吟詠情性」が複層的な意味を有していたのと、おなじ事情によったものとかんがえてよいのか。そもそも陸機はこの語をいかにおもいつき、いかなる意味

でつかっているのか。こうした疑問については、すでにおおくの研究業績が積みかさねられている（注3）。それらのうちから、私がおおく参考にした王運熙・楊明『魏晋南北朝文学批评史』一〇〇〜一〇五頁の見解を紹介しつつ、ごく僅少の私見ものをべてみたいとおもう。

まず陸機は「縁情」の語を、どうやつておもいついたのか。これについては、近現代の「朱自清『詩言志弁』を筆頭とする」おおくの研究者は、「詩大序」中の「吟詠情性、以風其上」や「発乎情、止乎礼義」「詩者志之所之也。在心為志、發言為詩。情動於中而形於言」を原拠にあげている。これらの文、字形はあまり似ていないが、陸機はここにヒントをえて、「縁情」の語をおもいついたと推測しているのだ。新奇な「詩縁情而綺靡」句といえども、やはり漢代の儒家詩学の影響下でつくられたと解するのだろう。この見かたは、おそらくだし。陸機が「文賦」において、詩ジャンルを「詩縁情而綺靡」とつづったとき、その脳裏に「詩大序」の字句が明滅していたことだろうと、私もおもう。

そうした「詩大序」の字句のうち、陸機は「志」字でなく「情」字に着目した。この両字、「第一章でもみたように」当時は相互に通用していたとはいえ、意識的理性的な含意のつよい「志」より、より原初的感性的な意を有した「情」のほうが、詩ジャンルにふさわしいと感じたのだろう。ただ陸機は、この「情」字で儒家詩学との相関を暗示しながらも、しかし「吟情」「詠情」「発

情」「動情」などの語はさけた。これら「吟」「詠」「発」「動」などの動詞をつかうと、あまりに「詩大序」にちかづいてしまつて、道德的な色彩（たとえば「情に発するも、礼義に止まる」など）がよくなるからだろう。

そのとき陸機の目のまえに、「縁」と「情」をくみあわせた「縁情」がちらついた。この「縁情」の語は、陸機が創案したものではない。この語は彼以前から、「感情によりそう」や「人情にしたがう」の意で使用されていて、魏晋のころの常用の語だった。たとえば、魏の曹義「申蒋济叔嫂服議」に「縁情制礼」（情に縁りて礼を制す）という用例があり、東晋の徐邈「荅曹述初難」に「礼縁情耳」（礼は情に縁るのみ）という発言が記録されている。これら旧来の「縁情」は、おおく「礼」と関連して使用されていることから推測されるように、あくからに「礼義に止まる」道德的な色彩をおびていた。いわば儒家的なカタい語だったのである。

ところが、ここが陸機の独創的なところだが、彼はこのカタい語から、道德的な色彩をぬぐいとつたのだ。陸機はこの「縁情」の語を、「文賦」以外に二度ほど使用している。それは、

○「思婦賦」悲縁情以自誘、憂触物而生端。

悲しみは「望郷の」情によつて誘発され、憂いは物にふれてきざしてくる。

○「歎逝賦」樂隕心其如忘、哀縁情而來宅。

悲しみは心中できえうせ忘却しやすいが、悲しみは心情によりそつてまとわりつく。

というものである。この二例中の「縁情」を吟味してみると、ともに「詩大序」ふうの礼義ニュアンスがぬぐいとられていることに気づく。ここでの「情」はともに、ひとの心に自然に発生する「情」であり、「礼義に止まる」お行儀のよいものではない。そうしたひとの自然な「情」から、さまざまな思いが生じてくるというのが、この二例中の「縁情」の意なのである（第一章で六朝における「縁情」の含意を検討した。それに関連づけていえば、「①感情によりそう」から礼義ニュアンスをぬぐいとつたものが、これに該当するだろう）。

「文賦」中の「縁情」も、これとおなじ意味だったに相違ない。つまり、語じたいは「詩大序」に由来するものの、その意味は、礼義ニュアンスをぬぐいとつた「①感情によりそう」だったのである。こうした「縁情」への新意充入は、「技巧倒れの詩文」の意だった「雕虫篆刻」に、あらたに「技巧すぐれし詩文」の意をくわえたのと、相似したプロセスだったろう。陸機も他の六朝文人たちとどうよう、表向きは「詩大序」由来の「情」字をつかつて儒家詩学の顔をたてながら（面従）、しかしその裏では、礼義ニュアンスをとりさり、「詩は自然な感情によりそう」ものだと主張しているのである（腹背）。

かくみてくると、「文賦」中の「縁情」においては、王・楊の両氏が強調されるように、「情」字から道徳的色彩をぬぐいとつたことが、たいへん画期的なことだったのだろう。これを比喩的にいえば、陸機はふるい革袋（「縁情」の語）のなかにあたらしい酒（礼義ニュアンスをぬぐいとつた「①感情によりそう」の意）をそそぎこんだ、というわけだ。いっぽう、「詩大序」の「吟詠情性」から「縁情」へ語形を変化させたものとみれば、ふるい革袋（吟詠情性）の語に手をくわえて改造し（「縁情」の語）、そこへあたらしい酒をそそぎこんだもの、といつてよからうか。そうした「縁情」の意の改变にくわえ、陸機はさらに「綺靡」の語も布置して、唯美主義ふう色彩を前面にうちだしていった。かくして文学批評史上に名だかい、「詩縁情而綺靡」という名句が完成したのだった。

ではこの「縁情」の語は、その後どうなったか。陸機が「詩縁情而綺靡」句をつづつたあと、この語は唯美主義文学の盛行にもなつて、しだいにひろまつていった。たとえば「文賦」以後の用例をみると、

○「王筠昭明太子哀冊文」吟詠性靈、豈惟薄伎。属詞婉約、縁情綺靡。

思いを詠じて詩をつくるのは、つまらぬ才能では  
ありません。太子さまは詩をつづつては婉麗であ  
り、感情によりそつて華麗に表現されたものでし

た。

○「徐陵玉台新詠序」九月登高、時縁情之作、万年公主、非無累徳之詞。

「宮中の美女たちは」重用の節句に登高しては、  
感情をのべた詩をつくり、左芬は万年公主の逝去  
にあたつては、「万年公主誄」のような徳のたか  
い作もかいた。

のごときであり、「文賦」の影響がよくうかがえる。じ  
つさい、詩ジャンルは「文賦」以後、「礼義に止まる」  
要素をうすめ、感情によりそつた唯美文学の方向へ舵を  
きつていったのだった。

ところがおもしろいことに、この「縁情」の語、「礼」と関連する場面では、あいかわらず「夫れ「喪制の」服は情に縁りて制す」（庾蔚之「五服」）や「情に縁りて礼を立つ」（徐広「荅劉鎮之問」）のごとき用例もあつて、礼制との関係はそのままつづいていた。さらには第一章でみたように、初唐の李善は「詩縁情而綺靡」句の「縁情」を、「詩以言志、故曰縁情」（詩は志をかたるものだ。だから陸機は本文で「縁情」と表現したのである）と注していた。つまり李善は、王筠や徐陵などの六朝の用例をきれいに無視し、「縁情」を「②思いを叙する」の意味で解しているのである（この解釈は、おそらく当を失していよう。李善は感情によりそつた唯美文学を是認しなくなつたのだろうか）。こうした例からみ

ると、六朝・初唐における「縁情」の語は、ことなる用法や解釈がにぎやかに混在していて、まだ一定の意味に收斂していなかったというべきだろう。

これは現代の我われに、ひとつの教訓をあたえてくれそう。それは、ふるい時代の用語、とくに文学関連の用語は、単一の意味だけではかぎらず、固定的にかんがえてはならない、ということである。我われは、「雕虫篆刻」の字をみると、すぐ揚雄の故事を想起して「技巧倒れの詩文」と解しがちだ。また「吟詠情性」ときたら、経書由来の語だから「儒家ふう思いを礼にそって詠じる」の意だと、即におもいがちだ。しかし当時では、かならずしもそうではなかった。場合によっては、「雕虫篆刻」は「技巧すぐれし詩文」という褒辞だったり、「吟詠情性」は「日々の思いを自由に詠じる」という、反儒家的な意味だったりするのである。このように、文学用語の意味は、そのときどきの状況や風潮によって、微妙にゆれうごいていたのだ。そうだとすれば、我われも固定的な先入観にしばられることなく、<sup>(7)</sup>個々の用例に虚心にむきあつてゆく必要があるであろう。

## 注

(1) 『文選』五臣注(李周翰)でも、この「縁情」の語に「詩言志、故縁情」と注している。つまり「縁情」の語に対しては、李善も李周翰もほぼおなじ注釈をほどこしているのである。

(2) たとえば、周作人『中国新文学の源流』(華東師範大学出版社 初版は一九三二)、聞一多『歌与詩』(聞一多全集 湖北人民出版社 初出は一九三九)、王運熙・楊明『魏晉南北朝文学批評史』(上海古籍出版社 一九八九)などが、それである。また日本の研究者では、林田慎之助氏が『漢魏六朝文学論に現れた情と志の問題』(『中国中世文学評論史』所収。初出は一九六四)のなかで、六朝文学における「情」と「志」の問題について詳論されている。

(3) 陸機「文賦」の「詩縁情而綺靡」句への研究史については、洪樹華「20世紀〈詩縁情〉闡釈之述評」(『社会科学研究』二〇〇四―四)、趙静・甘宏伟「対20世紀以来〈詩縁情而綺靡〉説研究的回顧与思考」(『許昌学院学报』二〇〇八―四)などがくわしい。一文人の一作品の一字句のために、こうした研究史がかかれているのだ。もって「詩縁情而綺靡」句に対する、研究者たちのつよい関心がうかがえよう。

(4) 『朱自清説詩』(上海古籍出版社 一九九八)所収の「詩言志弁」では三十五頁。なお朱氏同論の初出は一九三七年である。

(5) 『魏晉南北朝文学批評史』一〇二―一〇三頁につぎのようについて。「〈詩縁情而綺靡〉句の重要な意義は、〈言志〉のかわりに〈縁情〉の語を使用したことにあるのではない。この句が〈礼義に止まる〉を主張せず、詩の美感的特徴を強調したことのほうに、重要な意義があるのである」。

(6) 李善が「詩縁情而綺靡」中の「縁情」の語に、「詩大序」を引証せず釈義で注した理由も、これによって推測されて

こよう。つまり「文賦」の「縁情」は、語形が「詩大序」の典拠の字句（吟詠情性）と相違するだけでなく、内容的にも「情に発するも、礼義に止まる」の意をぬぐいとつていた。これでは、李善は「縁情」の典拠として、「詩大序」を引用するわけにはいかなかったらう。

(7) 本稿は、拙稿「陸機文賦札記」(「中京大学文学部紀要」第四四—二号 二〇一〇)を執筆したときに着想されたものである。今回、そのときの着想をもとにしつつ、あらたに想をねりなおして稿にしてみた。その意味では本稿も、「文賦」札記の一部に相当するものといえよう。